

ミオヤの老

職務の巻

職務信念……………

起信論……………

彌陀と諸佛……………

萬法統攝……………

一心十界と終局歸趣……………

職務信念

君よ。現在君が執てをる職務をば眞に神聖なる物として大ミオヤが選みてさづけ給ひし業として悦んでつとめて居る哉。將た是も人間の活役何か爲ねばならぬ故に此の務職を執つてをるに過ぎぬと思ひなされ給ふ乎。私が此迄多くの教育家に就て其職務に對する心の置き方を窺ふに宗教心のある方は前に屬し、信仰心の無き方は多くは後の方に屬してをる様に見えます。君の現に執つて居ますつとめは他の金銭杯の物質のみを取り扱ふ業とは殊にして人間の最も貴重なる精神上のことに人格の基礎を造るべき教育の

業務、最も神聖なる職務にして即ち天のミオヤより君に選みて授け給はりしことなれば大ミオヤに感謝の意を以て悦び勇みて業に従事する時は、非常に大なる力を以て満足の念を以てつとむることができます。

君よ夫にしてもそれは全く宗教心が充分に成したる上のことにて候。然らばいかに宗教心を成就せんとなれば宇宙間に獨り尊き大ミオヤの實在を信じて其に歸命信順してミオヤの恩寵によりて自己の改造を祈ることにて候。元來人間の天然の我は煩惱の皮殻に覆はれて如來の靈光を感受することができぬ。されば至心に念佛して無始の業障消滅し靈的光明を被むりて心靈が復活せば如來との間に於て、如來よ、アナタは全く我御親にて我は全くアナタの御子であるとの自覺ができる。自覺と共に暖かなる慈悲に融化せられて眞に靈的に生きて來ます。

君よ、君が理想の人格標準となる人を紹介いたしますから君はそれをきよき理想の勝れたる同胞として其方を模範として人格を形成し修養し給へ。

君は佛教の中に種々の方面に多く現はれてをる觀世音菩薩の何なる聖者なる哉を知り給ふ乎。彼の菩薩は種々の方面から見られてをるけれども私どもの彌陀を中心本尊と爲る如來光明主義より觀世音菩薩を見る時はかやうである。

四 彼の菩薩は宇宙唯一の尊き彌陀尊の法王子たると共にまた彌陀を尊信する諸の信仰家の代表的聖徒である。されば今君が如來の光明に依りて靈に復活し常に彌陀の聖意を奉戴して彌陀に献げたる心を以て自己の職務を神聖とし是ミオヤの使命として勇み進みて潔よく仕ふる心にて世に立つ時は即ち是觀世音の分身なりと俱にいける觀世音である。

觀經に恚やうに説いてある。若し誠に彌陀を信念し彌陀の聖意の水に清められ心の花開きし者は、即ち人間中の白蓮華である。蓮華は泥中より出でながら最も清淨皎潔にして麗はしき色と芳ばしき香とを呈してをる如くに人は煩惱の泥中より聖き信仰心が咲き出づるは恰も泥中より出たる白蓮に比すべく、されば觀世音菩薩も勢至菩薩も其が爲めに勝友と爲りて其人を愛護し給ふ。いかにとなれば其人は既に彌陀の子と生れたる者なればなりと。

視給へ、觀世音菩薩の尊像の寶冠に一の化佛を奉戴していますは即ち是れ大ミオヤなる彌陀尊なので而して相好圓滿百福莊嚴を以て人格を飾り胸に金銀瑠璃寶石等を以て瓔珞として嚴飾するは即ち智慧仁慈正義安忍剛毅謙遜貞操等の諸の道德にして是れ全く人格を莊嚴するの具である。然して有ゆる道德の根本は即ち彌陀の心光を信奉し慈悲を愛樂憶念し聖意の現はれを仰ぐ處のいとさよき心である。

五

六 君、活ける觀世音よ。宇宙の心靈界に輝ける彌陀の光明によりて靈に復活し給へ。活ける觀音として世に立ち給へ。人生宇宙の主なる無量光の光明を以て自己の心光としミオヤの使命を果さんが爲めに献身的に最善の努力をする者は是れいける觀世音なり。また觀音の分身なり。

視給へ太陽はすべての生物を活かす處のエネルギーを放ちて止まぬ。

彌陀は靈光を普ねく衆生の心靈に注ぎて靈的の活氣を與へ給ふて居る。

人は太陽の光を離れて活けることは不可能である如く、人の心靈は彌陀の光明を離れて活けることはできぬ。

彌陀の光明は人の心靈を永遠に活かす靈力である其光明を被りて本とうに有り難き信仰心が開らくれば即ち觀世音の白蓮のそれと同じく麗はしき潔よき活き々とした心と爲る。其信心の花開くが故に天の獨り尊き大ミオヤを信ずることが出来る。こなたからミオヤを信樂するが故にミオヤはこなたを深く愛護し給ふ。彼の青蓮の如き清らかなる慈悲の眸は我等が上に注ぎ給ひ、いとあたかなる慈悲に抱擁せらるゝ我等は眞に靈福に感じてをる。彼の海よりも廣きみむねが通うてをるから永しへに法悦と妙樂と平和とにくらさるゝのみならず大なる無限の泉源より流れ來る靈力

七

を加被せらるゝが故に日々の仕事の上に勇みと力とを得てつとめらるる。

彌陀の光明に觸れて本とうに活きくして朝のかやく如く夕日のまばゆき如く、我心のうちに赫々として永しへに活躍し得らるるは是不可思議の業によりてなり。

起信論

聽書 (6)

有法とは一心二門三大等なり。起信論は心の修行の鏡なり。

立義

大本の理

解釋

修行するにも學說の目を開いての上、盲目では慥ならず、學說的にすれば能く研究が出来る。

利益分は鈍根下根の者には、此經を見聞した計りでも、利益あると勘める。

九

修行 | 心理 | 安心
| 倫理 | 起行

因縁分

一總相 本論は宗教的學說なれば解脱を目的とす。他の哲學の如き知識の爲に非ず。況んや名利の爲に於てをや。

二形而上の理を知りて、學說に依りて、宗教的關係の眞理を意識せんが爲

三成熟衆生に心行の上にて於て進趣不退を示し

四未熟衆生修養法を示し。

五防禦障礙 保護信心

六修習止觀 理性開發して大乘の眞理を見、形式

本來自性をみとむれば其眞理なり。吾人は波ばかりみて眞理を見ざるなり。

七專修念佛 感情的信仰宗教的内容を充實せしむ。聖道門にては執

着は斷じて捨てよ。淨土門は活動であるから、惡執着に變はるに阿彌陀如來を始終執心して漸々に惡執を除けと

云ふ。是方便なり。凡夫として執着なしに生活し能はざる故に其執着を如來に變るなり。石鹼の譬の如し。

圓音とは如來一音一切法を説く、顯了ならずと云ふことなし。故に圓音と名づく。

四類機 |

- 一自力廣聞 | 自解經
- 二自力少聞
- 三他力廣聞 | 依論
- 四他力少聞 | 依論

一一

一〇

摩訶衍とは梵語此に大乘と云ふ。摩波衍とも云ふ。

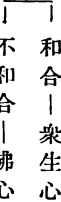
法は天則又自然法とも云ふ者法體は天則秩序を統攝する理體なり。

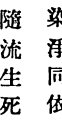
統は統一、攝は攝理なり。

法の體は衆生所依の心なり。

衆生所依の心 衆生心 肉の迷の心と本覺と和合す。萬法

の中に含蓄して統一する人間でも心なければ何にも活かない故に精神態である。

如來藏心に 和合—衆生心
不和合—佛心 本覺と一致すれば不和合

衆生心攝の 染淨同依
隨流生死

反流涅槃

心真如は體のみを見る。體を見は真如。

心生滅は體と相と用即ち活動する方面より見る。活動を見るは俗智

即ち差別の活きを見る。

心一つを心真如心生滅の兩方面から見る。吾々は波と水と別に見る如く活動の方は始終生滅する、生滅なければ活動することなし。

義とは相と用との屬性を有する體

三大ともに周徧する故に大と云ふ。

體は所依の體

増減とは現象の上のみにある。

二に相大とは一大心に無量の性功德具す即ち屬性なり。水の八徳の如し。八とは一甘三冷三軟四輕五清六不臭七飲時不損喉八飲不傷腹

藏性に内容無盡の性を具備す

本所乗とは前の三大に乗じて佛果菩提に至る。大性に乘するが故に名づけて大乘と云ふ。

彌陀と諸佛

彌陀は十方三世一切諸佛の本地にて一切諸佛は垂迹なり。彌陀

は天の日月にて諸佛は水中に映する月の如し。十方無量の諸佛は

彌陀の分身なり彌陀は一切諸佛を統一したまふ尊躰となる。彌陀

は大海水にして一切諸佛は海中の波浪である。彌陀は一切諸佛を

統攝せる本佛なり。故に無量佛と云ふ。一切諸佛とみだ一佛とは

實には一躰の兩方面である。統一の本躰より見ればみだといひ、

分現したる差別の方より十方諸佛といふ。

佛教に眞實教と方便教とあり。甲は圓教とて宗教意識の圓熟したる人に對し、乙は未熟の機類に應じての教。若し一切諸佛はみだ一佛の分身にして彌陀一佛は一切諸佛と現はれし故に一切諸佛彌陀を離れて一切諸佛なく、一切諸佛を以て彌陀の徳を顯はす。

故に一佛の無量分身とするは圓教にして一切諸佛は悉く皆別にして彌陀は諸佛の隨一とするは是別教である。

達者は彌陀は一切諸佛の本體と説き、一切諸佛は彌陀の分身と説く。藕益大師阿彌陀經の要解にも彌陀一佛と六方恒沙の諸佛とは本來一體の異方面と見たるが如し大日彌陀釋迦は一體三身にてまします。若し大日を中心とせばみだ釋迦は之れに附屬し、みだ

を正面とすれば大日釋迦は左右の方面にて釋迦を本尊とすれば彌陀大日は裏面とす。彌陀の三尊を彌陀の三身とも釋迦の三身とも云ふべし。今は大日は法身の毘盧舍那と云ふ物心不二の本佛絕對無碍の本佛である。若し相對の清淨界と染法界とを分ちて清淨界に彌陀と顯はれ染法界の衆生を度したまふに釋迦と現す。

また大日と彌陀とは一體の異名にして宇宙絕對的無比の獨尊を秘密教には大日なる四方四佛を統る本尊とし、公開教には阿彌陀如來の四智と云ふ。能く眞理に通ずる者は大日と彌陀とは同體の異名なりと云ふ。

理に聞き者は名に迷うて彌陀大日は全く別佛の如くに謂ふ。與教大師は大日と彌陀とは同體異名と釋す。卓見なる事識る可し。

釋迦と彌陀とは本體一なること彌陀無量光は人の身を受けて釋迦と云ひ、釋迦の大精神は盡十方三世に照り給ふ大光明である故に彌陀である。彌陀無量の光と無限の壽を離れて釋迦の精神なく人佛の釋迦出現したまはされば彌陀の大光明を現すことなし。

獨尊。如來は宇宙唯一絕對無比の尊きものである。一切衆生及び十方三世一切諸佛の父である。子は無量にして父は一、宇宙唯一の父は即ち如來である。故に威神光明最尊第一とは此をいふなり。

統攝。みだは一切萬徳を統べる四智圓かに照して萬法を攝めたまふ故に十方諸佛萬法を統攝す。

歸趣。一切萬行の歸する處に菩薩の波羅密向上進化の終局目的は彌陀涅槃界に歸趣するを極致とす。

三世諸佛も念佛三昧に依りて正覺を成すとは此の義である。然れば彌陀は一切諸佛の根本にてまた中心たると共に終局である。故に一切諸佛みだを讃嘆して止まず。一切の聖者も歸命して措くことなし。

萬法統攝

二〇

楞伽經に曰く十方諸刹土衆生菩薩中所有法報應化身及變化皆從無量壽極樂界中出。

是諸佛深秘の秘要にして實を克して論ずる事は十方無量の世界も衆生も悉く阿彌陀佛の本體より出で、而も理性具有すと共に依陀起性と偏計所執性の覆ふ所あるが故に自ら識らず、還て不如理の作意を作して自ら迷没す自ら出離解脱すること能はず。

此に於て又阿彌陀佛は本體より發展して十方無量の世界に衆生を解脱せんが爲に法報應身を現じ各々衆生を度脱す。

大日阿闍阿彌陀釋迦等の如し、變化身とは孔子、ソクラテース、モーセ、ヤソ、マホメット、達磨等の如し。

本體の阿彌陀とは學語には眞如。本法身。如來藏性。第一義諦等の種々の名詞を以て其本體を詮表す。

宗教の客體としての名詞に阿彌陀の號最も適切なり阿彌陀梵語此には、無量光。無限絕對精神態光明。全慧。全能。神聖。正義

恩寵。等の無量不可思議の靈徳を以て法界を無邊に無碍に照して一切を解脱靈化する勢力及び性能なるを詮表する義なり。

又無量壽と云ふ。其絕對無限の本質は永劫不變に常恒存在して一切を解脱靈化せしめて神的活動せしむる義なり。其佗阿彌陀の

二一

名字の中には無量功德の義を含藏せり。

十方諸佛と云も其本體は阿彌陀にして彌陀の本體の内容には無盡の法界を含蓄して遺すことなく故に諸佛の本地一切萬法の統攝する處一切の勢力の歸趣する處なり。

妙法と云ふも死的法軌にあらず。妙法。事理の活動する原理悉く永劫常然に生々活潑々地阿彌の全體大用にあらざるはなし。

個々の一念に三千の理の具すと云ふも個々本來佛性無邊の聖徳を具すと云ふも之が根底となり又之を統攝し一切の歸趣する處なるべからず即ち一切を統攝して歸趣すべき光を與ふるものは即ち阿彌陀無限の光なり。

たとへ何ほどに理を盡し力を致して究むるも阿彌陀の外に出でたる宗教客體あることなし。深く思ひ熟ら考ふべし。

一心十界と終局の歸趣

華嚴に心は巧なる畫師の如く種々の五陰として作らざるなしと。此心是佛を造り此心衆生を作る。心と佛と衆生とは是三無差別。

心の妙法たる一念の心が三千性相百界千如を具足して滅する事なし本來心性に三千の性相具足して循業隨縁に發現するが十界三千の境界となる。十界とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上之を六凡と名づける。聲聞、緣覺、菩薩、佛界を四聖法界と名づ

二二

二二

け此十界は本同じ一の心性なれば各一法界に十界の理性が具足して循業隨縁によりて十界の内何れも造り出すなり。

十界には相と性、本體と力用と作業と、習因と助縁と、結果と報應と、本末統一するの十法あり。

地獄には相と性格と本體と力用と作業とは最賤劣の苦の相。すべて苦なる惡ならざるはなし。其地獄の苦體及苦の相となる。之の因は惡習横惡の誘惑の刺戟によりて惡性格を作る。惡の用と作業とが習因となりて精神即ち意志に地獄の塑像が已に成熟して之を鑄る處の惡業の材料が充分終身に作業せしによりて印壞文成忽ち人の色陰が轉じて直に地獄の五陰即身體と精神とが發現するなり。

邪見の衝動より肉慾我慾の爲に殺盜邪淫の身に於る、惡口詐僞等の語、貪瞋邪見忿恨惱嫉憍慢等の心。惡習因が終に惡の性格となりて塑模となり不正の意向によりて肉慾の爲に殺盜淫等中品の惡業の材料を以て肉慾的の習因の性格を塑模る處の無財餓鬼。

我慾の爲めに他を壓倒し、自己の私慾の爲には、自己及び他人の害をも顧みず中品の殺盜、口業の惡業材料として、我慾の塑像の無財餓鬼を作る。

癡闇にして人理を辨せず、良知良能開展せず、性肉慾の動物生活を書として、下品の十惡を以て傍なる性格傍生を感ず、此二種

を惡道と名く。

上品の惡は彼は正知と善者との正反對なる邪見暴惡の惡衝動より惡業をなす。彼は惡の方面が開展して善に反對す故に地獄なり。中品の惡は彼は肉慾我慾の方面のみ開展し、公道に反乖す、彼は肉の爲に靈を犠牲にす故に餓鬼道に墮して、餓渴に煩悶して止ることなし、彼は日々に守財奴なりまた肉の奴隸なり。

下品の惡は、人面獸心彼が意象を暴露せばいかゞ何の處にか人格あらん、身を養ふ慾動物生活の外に何か彼が意志ならん傍生の性格と謂すして何ぞや。

三善道

善に三品あり業識即ち性格に三品あり此を三善と名づく。人あり善を作すも其意向としては傲慢にして宗教の理に於ても未だ識らざるも敢て聞くことを用す自から道ありと謂ふて眞善に非ず名を求め榮を争ひ權威を貪り、人の爲に尊敬せられんことを以て全精神を作す。名を争ひ威を競ふ戰鬥彼が意に斷るなし。然れども彼れが名聞の爲に惡を作らず。

倫理を廢せず之を修羅道の候補者とす、人あり仁にして能く愛し義あり、禮あり、能く邪正を知りて苟くも邪に陥らず好て善を作す。

正當なる人格あり倫理に戻らず彼は形ち人たるのみに非らず、

全く人格ありて倫理的生活をなすは人にして又人なり。

人あり仁にして博く愛し、倫理を正し、高き理想ありて最とも公明正大なる衝動より善をなし彼は天道に則りて正義あり國家の爲に人類の爲に身を犠牲にすることを厭はず、情操の清淨高潔にして志節天の如し、能く愛し能く行て厭ふことなく他に施して倦むことなく最上品の善を作すは天上なり。

是三善道の塑像にして且つ材料なり、斯の如く三品の神識即ち性格は三善道に匹す可し。三善と三惡とを合して六道と名づく。

此の六道は一の善惡二性の上中下として何れも未頃天然の宗教の門に入らざる心志神識にして、其理想も目的も信仰も隨て天道入理を出でず故に之を六凡と爲す。

進で六凡を超越して生死の外に出で人間道の表に超て高く、涅槃の聖域に神を栖まして三界に超絶して精神は高く涅槃に在て迹を人間に示すもの四聖と爲す。

一に聲聞。此肉慾我慾の源なる一切衝動の根底なる主我を斷滅し至理と精神の內的に一致し、高く心を三界の表に出で自ら寂滅を樂とする者は聲聞是なり。是らは自ら發悟の慧あるにあらす、又先哲の模範によりて之を習ひ之に軌つて偏眞の解脱をうる。

緣覺は此實行の哲學者とも名づくべく、自らよく自己の源底を究め生死因縁の原理を盡し、理を究め性を盡して主我を脱し生死

を超て清淨なる虚理と、心意を一致して靈妙なる精神生活を營むものを緣覺と云ふ。

菩薩は菩提薩埵、覺有情の梵語絶對眞理の佛陀を理想し内面に觀念的に佛陀と一致し。表面は個人にして人格を具す、唯知力的に佛知見開示して佛智と契合するのみにあらず、心情解脱し融合し全く情操を佛陀の中に安立し志節皎潔にして芙蓉の如く跡を塵裏に和するも未だ曾て泥に染着せず、法界を身とし一切の萬類を重擔として同事利行六度の行を以て弘願の爲に絶對眞心の中に最勝の精神生活するものは菩提薩埵是なり。

佛界に二種あり、眞佛と人佛となり。眞佛とは、絶對眞法身。無限の光壽。世界萬物の根底にして、亦一切の萬類を統攝し一切活動力の歸趣する處。三千十界は是の絶對至理を本體として又此に攝取靈化せざるなし十方刹土の法報應の三身及び變化身等も悉く此を以て所依とす。

人佛とは眞佛より發展し一切衆生に救度の道を示さんが爲に人中に出現し摩奴即ち人佛として衆生を度す。釋迦牟尼佛是なり。十方諸佛も亦復然り。

眞佛は圓滿報身に發展し、至眞至善至美の靈界最高の處に儼臨し神聖、正義、恩寵等、及び一切能、一切慧等を屬性とし無上の權威を以て智無上無限の愛より光明普ねく十方無限界を照す常恒

不斷に一切を攝化する。

三二

歸越

衆生は元佛性を具有し且つ主我罪惡を覆り十界各十界を具す。

十界各十如を有す即ち互に相合すれば百界千如なり。國土と五陰

と衆生即ち土、身、心なり。此三世間に配すれば即ち十如三千なり。

各々の個人は此三千の性能を具備す。縁に隨つて十界の中に何れ

にか形相をあらはすなり。人の終身の習慣と性格と行爲とは善惡

によつて三善三惡四聖を現す是唯心の所造なり各自の意向が變る

所なり。

眞理の終局に歸越するは獨り佛界のみ。佛界に歸するは眞理の

故に自然なり、法然なり、故に往易し。唯絶對無限光壽即ち彌陀

の聖名を崇び、聖意を仰ぎそれに歸せんが爲に意に彌陀の身を憶

念し口に彌陀を稱へ身に彌陀の行動を實現す。

一念彌陀なれば一念の佛。念々彌陀なれば念々の佛。佛を念す

る外に佛に成る道なし。三世諸佛は念彌陀三昧によつて正覺を成

すとなん。

三三

昭和八年八月二十五日 印刷
 昭和八年八月二十八日 發行
 編輯兼發行人 山崎辨成
 小石川區關町六十五番地
 印刷所 小林七太郎
 小石川區關町六十五番地
 印刷所 靜文社印刷所
 電話牛込五四一九番
 東京市小石川區水道橋三丁目四十四番地
 ミオヤのひかり社
 振替口座東京六六八五一番